



Title	中部ベトナムにおける音楽文化の伝承と変化：宮廷音楽を中心に
Author(s)	金, 英峰
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40517
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	金英峰
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第13599号
学位授与年月日	平成10年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学位論文名	中部ベトナムにおける音楽文化の伝承と変化－宮廷音楽を中心に－
論文審査委員	(主査) 教授 山口 修 (副査) 教授 天野 文雄 助教授 桃木 至朗

論文内容の要旨

本論文は、いまや社会主义国家体制のもとにあるベトナムにかつて栄えていた中部の王都フエに部分的にせよ辛うじて伝承されている宮廷音楽の伝統を対象とし、現状がはらんでいる問題点をフィールドワークと文献研究により明確に提示しながら将来への展望を提供することを目的としている。序論「音楽文化の伝承と変容－比較文化学的問題提起」の第1章「東アジア宮廷音楽のネットワーク」では、古来から韓国、日本、ベトナムの文化が、中国の影響を濃厚に蒙りつつ相互に緊密なネットワークを保ってきたことから説き起こす。第2章「調査の方法」で、フィールドワークのあらましが記述される。本論の第1部「フエにおける音楽文化の伝承と変化」はフエ音楽文化の概略である。通し番号による第3章「フエ音楽の社会的文化的環境」で音楽活動を支える脈絡に加えて、元宮廷樂士であった長老音楽家が数名まだ活動中であることが述べられる。第4章「フエの伝統音楽」では、フォークロアの音楽、民間芸能、寺社芸能、宮廷芸能といったジャンルの存在とそれらが相互に影響関係をつくってきたことを指摘する。

本論の主要部分を成す第2部「ベトナム宮廷音楽の伝承と変化」では、第5章「古くて新しい概念ニャーニャック(雅楽)」でこの用語が必ずしも宮廷音楽全体を指すとは限らないことを指摘したうえで、第6章「対概念としてのティエウニャック(小楽)とダイニャック(大楽)－概念・楽曲・楽器編成」において、時には雅楽と混同される繊細で室内樂的な小楽と、それとは対照的にジャンル概念も安定しダイナミックな演奏を特徴とする大楽を対比させて論じる。このような用語の混乱を背景にしつつも、昔日から今日まで頻繁に演奏され人びとに親しまれてきたレパートリーがいくつかあり、そのなかの10曲から成る組曲とも呼ぶべきものを小楽であると判断して詳細に分析するのが第7章「ティエウニャックの楽曲《ムオイバンタウ(輦部十章)》の伝承と変化」である。その他に、宮廷ではさまざまな儀式を含め、大小の宴会に応じてティチュン(司鐘)とティカイン(司磬)、ティコ(司鼓)、テニャック(細樂)、ヌニャック(女楽)、クアンニャック(軍樂)などのジャンルが存在していたことを述べるのが第8章「現在、確認できない宮廷音楽」である。ところが、現在フエ地域における教育現場や観光産業の一環としておこなわれている演奏会などでのレパートリーの中で、宮廷音楽を起源とするジャンルはダイニャックとティエウニャックが挙げられるのみである(第9章「宮廷音楽の多面的展開」)。

社会情勢の変化により宮廷が崩壊し、宮廷音楽は必然的に脱宮廷化と構造上の変質過程をたどることになり、その過程で宮廷音楽の諸要素は取捨選択される(結論「音楽文化の変化－縮小・融合・消滅と新たなる展開」)。小規模の楽団で十分である現代のフエの社会環境は、既存の諸ジャンルを縮小したり統合するかたちで宮廷音楽の伝統を変貌

論文審査の結果の要旨

東アジアに展開してきた文化交流は実に多岐にわたっており、その一環を成す宮廷音楽は雅楽ほか国により異同のあるジャンルを包含しながら一大ネットワークを形成している。それゆえ、人類の豊かな音楽遺産の重要な一端を担う東アジア宮廷音楽は、現代的な意味のあるかたちで現代の国際社会のなかに位置づけられる必要がある。こうした主張が台頭してきた最近の動向に呼応して、滅亡の危機に瀕していたベトナムの宮廷音楽の知られざる実状を過去の状況とも照らし合わせながら詳細かつ動態的に吟味した研究として、本論文がもつ意義は大きい。しかも、同様の脱宮廷化の後に脈絡変換を遂げて「国楽」の中心に位置づけられようになった韓国の雅楽（アアク）のケースが知られているので、それに通暁した韓国人の目で観察され執筆されたベトナム関係論文が日本の大学に提出されたという事実も意義深い。歴史研究、地域研究としても、中国からの影響そのものだけでなく、韓国や日本のケースを念頭においたベトナム研究は、長らく待望されていたものである。第二に、暖かい人間関係を築きつつ全うされたフィールドワークの成果が、元宮廷楽士たちからの発言を系統的に記録したことや、歴史的に意味のある貴重な写真を掲載する許可を得ていることなどに反映しているのも貴重である。また、論者自身がハノイの図書館に眠っていた楽譜資料等を「発見」し、その他の文献史料をも活用しながら歴史学的な視点をも加味している。第三の特長としては、音楽学の現代的課題である「社会変化と音楽様式」というテーマに鋭く切り込んで、そのために採譜、訳譜、分析などの作業を綿密におこなっていることが挙げられる。

ただし、本論文にはいくつかの短所も見受けられる。たとえば、いまや生きたかたちでの雅楽が存在しない中国や琉球はともかく、脈絡変換を遂げた韓国のケースや宮廷音楽を温存する日本本土のケースと比較する論議が充分になされているとはいえない。また、現地で存在している概念や用語の混乱から抜けきれていない側面が認められる一方で、逆に整理しすぎていると思われる側面もあると言わざるを得ない。しかしながら、これらの短所は、今後の研究活動により補われてゆくべき性質のものであり、学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうものではない。

従来の研究の水準を超える優れた本論文は、ベトナム音楽史の解明に大きく貢献するものである。よって本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに充分な価値を有するものと認定する。